



TITLE:

社会研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

川村, 俊蔵; 河合, 雅雄; 東, 滋; 鈴木, 晃; 森, 梅代; 足沢, 貞成

CITATION:

川村, 俊蔵 ...[et al]. 社会研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1977, 7: 11-12

ISSUE DATE:

1977-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162783>

RIGHT:

遅延反応を4つのキーを用いた連鎖スケジュールで行ない、アカゲザルの空間位置に関する短期記憶において、キー押しのオリエンテーション、「リハーサル」、「コーディング」の持つ役割を検討した。

6) ラットの拡張性抑圧に関する研究

松沢哲郎

拡張性抑圧をもちいて、ラットにおける摂水行動、視覚的誘発電位についての基礎的研究、および回避条件づけによる視覚的弁別課題の脳半球間転移について検討をおこなった。

7) ニホンザルの視覚に関する研究

松沢哲郎

ニホンザルの視空間知覚、とくに方向の視覚的弁別と視野の異方性について、学習曲線、反応時間の観点からの分析をおこなっている。

総 説

- 1) 室伏靖子 (1976): サルの反応時間にみられる 大脳半球間の非対称性について。“感覚と行動の神経機構”(久保田・佐藤共編), pp. 189—210, 産業図書。
- 2) 浅野俊夫 (1975): ニホンザルの実験的行動分析における理論的展開。心理学評論, 18, 181—197。
- 3) 浅野俊夫 (1976): 強化のスケジュール。“学習心理学”(能見編), pp. 89—118, 大日本図書, 東京。
- 4) 小嶋祥三 (1976): 実験的行動分析と脳機能の研究。心理学評論, 18, 198—206。

学 会 発 表

- 1) Environmental determinants of primate behaviour.
Asano, T. & E. Fantino
6th. Congress of the IPS (1976)
- 2) Concurrent chain スケジュールによる強化スケジュールの選択
小嶋祥三・室伏靖子
日本心理学会第40回大会 (1976)
- 3) いわゆる Spreading Depression をもちいたラットの行動
松沢哲郎
日本動物心理学会第36回大会 (1976)

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄
東 滋・鈴木 晃
森 梅代¹⁾・足沢貞成²⁾

研 究 概 要

1) ニホンザルの分布とその変動に関する研究

1) 教務職員 2) 教務補佐員

川村俊蔵・東 滋
鈴木 晃・足沢貞成

京都、兵庫、滋賀、和歌山、三重、岐阜、宮崎のニホンザルの分布の現状について、一次資料の集積をおこなっている。

岐阜、宮崎両県と東北地方の南部などの天然林地帯について、ニホンザルの分布像の形成過程—多くは地域個体群の衰退史である—をたどった。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行なっている。

3) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域の予備的調査を行なった。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

4) ニホンザルの地域個体群のあり方

鈴木 晃

上信越地方を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査およびとりまとめを行なってきた。

5) ニホンザルの性行動についての研究を行なった。

河合雅雄

6) ニホンザルコドモの社会関係の発達

森 梅代

あそび仲間関係、社会関係の発達における性差および、母子関係に関する研究を行なっている。

7) 東アフリカにおける各種霊長類の社会学・生態学的研究のとりまとめ

鈴木 晃

8) メンタウエイ諸島における4種のサルの社会学的研究

川村俊蔵・渡辺邦夫

1976.5—1977.3までインドネシアのメンタウェイ諸島の中のシブルット島において、ヤセザル類の生物社会学的調査を行なった。

9) エチオピアにおけるヒヒ類の社会学的研究

河合雅雄

エチオピアにおけるゲラダヒヒの社会学的研究についての論文を作製した。1975年8月から76年1月までに行なったアスビシヒヒとマントヒヒの種間雑種の社会生態学的研究のまとめを行なった。

10) ゲラダヒヒの生物社会学的研究

森梅代

エチオピア高地セミエン国立公園で50年10月から51年3月まで現地調査を行ったゲラダヒヒの研究のとりまとめを行なった。

11) 房総半島の翼手類の季節的移動と集団のなりたちに関する研究

鈴木晃

各地にちらばる複数の洞穴に居住する翼手類、ユビナガコウモリ、コキクガシラコウモリの調査を、1958—1961に引き続きマーキングをほどこして再開した。

総説

- 1) 鈴木晃 (1977): 霊長類の生態。「霊長類」人類学講座2 (伊谷純一郎編), pp.147—194, 雄山閣, 東京。
- 2) 鈴木晃 (1977): ニホンザル—その生息環境。人と自然 No.2 特集日本の鳥獣: その環境<1> pp.51—56.

論文

- 1) Mizuno, A., M. Kawai, and S. Ando (1976): Ecological studies of forestliving monkeys in the Kibale forest of Uganda. Kyoto Univ. African Studies, Vol. X., 1—35.
- 2) 河合雅雄, 菅原和孝 (1976): 雑種化と霊長類の進化 (1), 自然 31 (11): 48—57; (2), 31 (12): 64—79.
- 3) 鈴木晃 (1976): コドモを食べるチンパンジー。サイエンス, 6 (8), 18—29.
- 4) 鈴木晃 (1976): 霊長類の食性・遊動パターンと社会。生物科学, 28 (4), 210—216.
- 5) 鈴木晃 (1977): チンパンジーの社会と適応。“チンパンジー記” (伊谷純一郎編), pp. 251—336, 講談社, 東京。

報告その他

- 1) G. G. イートン (1976): ニホンザルの社会秩序。サイエンス, 6 (12), 103—114 (鈴木晃訳)。
- 2) 東滋 (1976): 岐阜県カモシカ生態調査報告。昭和50—51年度, 岐阜県。

- 3) 東滋 (1976): カモシカ被害と森林施業。中部林業研究会報告

学会発表

- 1) 屋久島のニホンザルの生活

Ⅱ. 遊動する群れのグルーピング

東 滋

第23回日本生態学会大会 (1976)

- 2) Recent mode of human impact and its ecological consequence on the survival of Japanese Black Bear.

Azuma, A and H. Torii

Fourth International Conference on Bear Research and Management.

- 3) 野生チンパンジーのグルーピングの機構

鈴木 晃

第30回日本人類学会民族学連合大会 (1976)

- 4) 霊長類の地域個体群における社会的単位集団の不均等性と人口圧について

鈴木 晃

第21回プリマテス研究会 (1977)

- 5) ゲラダヒヒの one-male unit のリーダーの交代と新しい Unit 形成

森 梅代

第30回日本人類学会民族学連合大会 (1976)

変異研究部門

野沢 謙・和田一雄

西邨顕達¹⁾・庄武孝義

研究概要

- 1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し、群内、群間の変異性を定量化する。昨年度までにニホンザル約40群、総個体数約1,600頭の血液試料について、27種の蛋白の構造を支配する計30遺伝子座の検索をおこなった。このデータをもとにして、統計的検討を加え、繁殖単位間の毎代の移出入率、遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い、ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業続行中である。

- 2) Macaca 属サルの系統的相互関係

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルを含む Macaca 属サル各種から採血をおこない、上記1)と同一の方法によって種内、種間の遺伝的変異性を定量化し、それら種間の遺伝子構成上の差を遣

- 1) 現在同志社大学工学部